

**Arthur Melnick, *Kant's Theory of the Self* (Routledge, 2009, v+193p.)**

天野恵美理

---

本書は、『純粋理性批判』におけるカントの自我論について書かれたものである。とはいえ本書は、著者も自認している通り、カントが直接的に明示したことを探究するというよりもむしろ、テキストに明示されていないところに、著者独自の観点からの記述的分析を与えることによって、展開する。

本書は以下のような構成をとる。まず、I部において、カントにおける自我についての著者の見解が提示され、この自我がカントの超越論的観念論においてどのように主張されているかが示される。II部においては、この観点が、第一、第二誤謬推論においてどのように説明されているかが示される。III部においては、この観点がA版の演繹論における統覚の同一性についてのカントの主張を明確にすることが論じられる。この観点を、IV部においては第三誤謬推論に、V部においては第四誤謬推論に、それぞれ適用する。

本書は、カントの認識論に即するというよりもむしろ、著者独自の存在論の展開にその特色を有していると、評者には思われる。たとえば、本書の構成を上記したが、まず第一に述べられているのは、カントの

テキストとの明示的な対応関係を持たない著者の見解である。また、著者は自らの見解をフォローするためにカントの引用を度々用いるのであるが、さまざまな箇所からの引用、たとえば純粋理性の誤謬推論と第二類推からの引用とが並置されており、それらの箇所が『純粋理性批判』のテキスト全体においてどのような位置づけを与えられるかということに関する詳しい説明がなされない。著者はただ、誤謬推論や演繹における自我論が、著者の見解に即して読まれるならば矛盾しないと主張するのみであり、著者の見解が一面的であるという批判もなされうる。しかし、本書が著者自身の見解を前面に押し出すものであるとしても、そのことが必ずしも批判の対象となるわけではないであろう。序文によれば、著者は、ハイデガーやメルロ＝ポンティ等に多大な影響を受けたため、著者の観点は現象学的な観点に多くを負っており、またストローソンやパーフィット等の分析的な伝統をもバックグラウンドとして持っている。著者のこのような観点はそれ自体独自性を有すると言えるだろう。よって、本書評では、著者のカント解釈を、カントのテキストに照らし合わせながら、微に入り細を穿って検討するというようなことはしない。そうではなくて、むしろ、本書の中核を担う、著者自身のオリジナルなアイデアを明瞭に述べることを主眼としたい。

さて、著者によれば、思考する自我は、知性的な能力を組織化する。組織化とは、

必ずしも明示的なものではなく、要するに以下のようなことである。ある一つの思考が顕在化するためには、その思考がうまく通用しなくなったときのためのオルタナティブや、単に可能的であるような思考、さらに、言語化すらもされえないような、一つの思考を支えているとしか言いようのないもの、といった、組織的な全体が必要とされる。

著者はこのような組織化を説明するために、チェスのゲームにおいて、次に駒をどう動かすかということに関する思考を例として挙げている。著者の説明によれば、ある一つの動かし方へと、思考がまとまったとき、その一つの動かし方という焦点化された思考の周辺には、まとまりのない思考のコンテキストが合同している。組織化という作用そのものは、全体的なものであって、ある一つの動かし方という焦点化され顕在化された結果とは別のものとしてあり、特定の思考に回収されない。しかしそうである一方、組織化は特定の思考への集結を目指してなされる。だから、思考は、まとまりのない知性的整理の作用の全体を規定するものであるという、相容れない双方に両足を跨ぐかのような、きわめて「不安定」とでも言うべきポジションに置かれる。

著者によれば、思考の主体性とは、このような組織化の作用以外の何ものでもなく、ゆえに、ある思考と思考する主体との区別は、思考という行為がそこに属しそこから引き出されうるようないかなる実体をも求

めることなしに、組織化という作用それ自体においていわば内的に遂行されうる。

このような組織化との対比として、著者は、コンピュータがチェスのプレーをする場合を引き合いに出している。そこには、すでにあつたものとしての抽象的・記号的なフローチャートにおける、明示的な区別があるだけである。コンピュータがたとえ動的に操作を実行していたとしても、コンピュータ自身は、思考が焦点化されたり、その周りに何かが渦巻いていたりという、思考が形成される途上にあることはない。コンピュータにおいて、たとえば1は端的に1であつて1でしかないのであり、私が1という思考を紡ぐときにあるかもしれないもの、たとえば線のイメージであるとかドーナツの穴であるとか、さらにもっと言語化されないものなど、をも取り込みうるような包括的な組織化は存在しない。

組織化におけるこうしたダイナミズムは、私たちの意識的思考の特徴である。意識的な思考においては、私は思考を意識しているのではなく、思考を抱いているということ意識しているのである。焦点化された意識的な思考と、それを支えるまとまりのなさは相補的な関係にある。上でも触れた通り、私は、焦点化された思考が全体性を規定すると同時に、まとまりがなく規定されていない知性的作用が、固定された思考を規定するという感覚を抱く。だから私は、明示的な思考を意識する一方、混沌としていて規定されていない、現前としての存在

への、感覚や感情を持つ。さもなければ私の主体性は形成され固定された思考に吸収されてしまうだろう。知性的行為のこのようなあり方が、そのつど、主体と焦点化された思考とを隔てるのである。著者の提示する、思考が生成する場においては、焦点化された思考と組織的な全体とは、だから、単純な含む／含まれるの関係、あるいは部分と全体の関係——こうした関係は純粋に論理的な関係であろう——として捉えることは出来ない。

以上が、カントにおける自我に対する著者の根本的解釈である。著者は、自らの見解を、より具体的な例を用いて説明している。数字を数えることの例である。数字をたとえば20まで数えるとき、「20まで数えるぞ」と自分に言い聞かせたところで、当然のことながらどうにもならない。私は、20まで数えるうちの各々の段階において、今はこの段階であるということを意識せねばならない。一方では20という固定的な数字を念頭に置きながら、もう一方では20に至る諸々の段階や移行といった、まとまりのない全体をも意識する。これが、先に「不安定」と述べた思考のあり方なのである。言い換えれば、思考する主体においては二重の統一が存する。すなわち、手順（進展する時間）に属する統一と、手続きを「実行すること」における知的理解の統一である。私の知性的同一性は、時間の進展に応じて伸展する。これがわれわれの知性的存在の実在性である。

著者はさらに、思考実験を用いて、超越論的自己意識の存在論的地位を考察し、この超越論的自己意識が完全に組織化の作用の内に存することを示す。

たとえば、私が、青いものの連想などの無意識的な思考をしている際に、人から「何を考えているのか」と聞かれ、それに答えるとする。私は人に答えるために私の思考から引き退かねばならないが、私はまた、人に答えるために、まとまりのない思考を形式化するというかたちで、思考とともに留まることにもなる。このように、私の主体性がその内に取り囲むのは、思考そのものではなく、むしろ、その思考の「不安定性」にも拘らず、私が端的に思考の主体であるということである。つまり、自己意識において私に対して「表象」されるのは、形成された思考ではなく、思考を形作ることそのことである。著者によれば、「私は私の思考の自発性を表象できるだけ」（B158）というカントの言明がこの事実に対応している。

著者の見解に、第二誤謬推論の主題である単純性という観点から光を当てるならば、「我思考す」においてあらわれるものとしての「私」は、中心的思考を囲む運動であり、そうした運動は全体的なものとしてしかあらわれないので、「私」の単純性が言える。

このことの証左として著者は以下のような思考実験を挙げている。第一段階として「空」という言葉を聞いたのちに中断が

あり、第二段階として「が青い」という言葉聞いたとしよう。この場合、第一段階における思考は、第二段階における思考の一部ではない。というのも、第一段階においては、「空」を巡る思考として、その青さ、かなしさ、月、星、といった、まとまりのない思考があるが、第二段階に至っては、聞かれた内容は「空が青い」という一点に収束して、第一段階においてあったようなまとまりのなさは変形しているからである。この推移に関して、「空が青い」という全体的な思考に関する主体性は、空の青さ、かなしさといった、それ以前の他の主体性を部分として持つものではありえない。

著者は上記のような思考実験に至るところで用いながら、カントにあっても矛盾がないとされる、自らの見解を説明する。見てきたとおり、著者の主張自体は、さほど複雑なものではないだろう。しかし、本書全体を見渡してみると、カントのテキストやカントにおける概念を織り交ぜながら、それと矛盾無く議論を進めていることが、本書に難解な印象を与えていることが分かる。カントに対する参照が無かったとしても、著者の主張は、見てきたような思考実験等による分析的手法によって、十分に伝え得たのではなかろうか。そして、そうであるなら本書は随分とすっきりしたものになるはずだ。

さて、現象学や分析的伝統といったバックグラウンドを持つ著者が、そうまでして、カントのテキストを引っ張ってきて、カン

トと一応の辻褄が合うものとして自らの論を主張することに、どのような意義があるのかということ、本書の読者は考えざるを得ないのではないか。この点に関して、評者は確たる解答を与えることはできない。しかし、本書は明らかにカントと現代哲学との橋渡しをしているものであり、とりわけ自我論においてその橋渡しをしたということ、見るべきところがあるのではないだろうか。著者の見解を応用するなら、哲学史もまた、変化しながら繋がっていく、ひとつの「私」として言い得るのだから。